

編集後記

向田邦子はエッセイで「ことばは音である」, 『馬鹿』私を書くこの一言のセリフを, 森繁さんは, その時々の子チュエーションにふさわしく, 百通りにも二百通りにも, いろんな人間がいるんだなあ, と書いた人間をびっくりさせるほど, 鮮やかに, 空気の中に立ち上らせてくれました」と書いています。「馬鹿」は記号としてはひとつですが, 発話におけるプロソディーなどの変化により, ささまざまな情報を加えることができます。記号としての言語は主に左大脳半球, プロソディー, 隠喩など記号以外の言語特徴は主に右大脳半球が担っていると言われていいます。

自分の研究成果を発表する方法としては論文と口頭発表があります。論文は記号である文字を駆使して, なるべく正確に自分の見つけた事実を伝えるものです。一方, 口頭発表は同じ事実を伝えるにしても少し様相が違います。その事実を見つけるに至った経緯, その時の感情の動きを含め, 多少のアドリブを加えながら伝えることになります。昨今は COVID-19 の影響で Web での講演が増えており, 口頭発表の利点がいまひとつ生かせないのは残念なことです。もちろん内容のすばらしさだけで心に残る講演もあり

ますが, 総じて Web で聞いた講演は印象が薄くなる気がします。普通の講演者は森繁久彌さんのように音声だけでいろいろなニュアンスは伝えられませんので, Web 講演では身振りや手振り, 表情や佇まいなど言外のメッセージが欠けてしまうのでしょうか。

自分が見つけたことを記号を使って論文にまとめたら, それを多くの人に知ってもらうため, 熱意を込めて口頭発表することは大切な作業です。SNS を使って周知する方法も広く使われるようになってきましたが, じかに対象に伝える手段として口頭発表は未だ重要な役割があると考えられます。将来 ChatGPT が研究論文を書いてしまう時代が来るかもしれませんが, 自分で考えたことを論文化し, それを自分の言葉で語ることは研究を行った本人にしかできません。それは自分の思考のプロセスを磨き上げていく過程でもあります。特に若い先生方は, ぜひ本誌への投稿をきっかけにして, 考え, 発表する習慣をつけていただければと願っています。

(鈴木匡子)

〈編集委員〉

編集委員長	小野寺 理	編集副委員長	三澤 園子		
編集幹事	石浦 浩之	漆谷 真	杉江 和馬		
編集委員	今井 富裕	木下 真幸子	古賀 政利	櫻井 圭太	柴田 護
下畑 享良	鈴木 匡子	辻野 彰	坪井 義夫	中嶋 秀人	新野 正明

「臨床神経学」	第63巻 第3号	2023年3月1日発行	
編集者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発行者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		西山 和利
印刷所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス : <http://www.neurology-jp.org/>